

アーラヤ識の存在について ——『秘義分別摂疏』の考察（9）——

千葉 公 慈

About the Existence of Ālaya-vijñāna —— A Study about *Vivṛtaguhyārthapīṇḍavyākhyā* (9) ——

Koji CHIBA

1. 有漏と無漏の通曉

前回の考察^{*1}において、『秘義分別摂疏』（*Vivṛtaguhyārthapīṇḍavyākhyā*、以下 VGPV と略称）^{*2}によれば、認識対象への通曉、すなわち諸存在への縁起の観察としては、二種の通曉（熟練知）があり、従来から知られる善巧そのものの、すなわち通曉というはたらき自体は、智慧としては否定されるべきなのであるという興味深い主張が展開された。通曉（*kausalya*, *mkhas pa*）とは一般的に巧みに手だてをめぐ

らせて把握対象を直観的に分別する知のことを指すので、他派においては文字通り縁起に基づく観察が正しくはたらいした場合にのみ「通曉する」といわれていたが、VGPVの著者によれば、増益と損減の正しい認識判断をもたらす三性説を理解しない限り、本来的な通曉ではないと強く否定されるのである。それが以下の箇所である。

"gzhan dag" ni^{*3} phung po la sogs pa rten

*1 拙論「アーラヤ識の存在証明—『秘義分別摂疏』の考察（8）—」駒沢女子大学研究紀要・第14号所収、pp.131-140
なおそれまでの関連する考察は以下の通り。

同「『秘義分別摂疏』覚え書（1）」駒沢女子大学研究紀要・第8号所収、pp.209-216

同「『秘義分別摂疏』覚え書（2）」日本文化研究（駒沢女子大学日本文化研究所）・第4号所収、pp.117-131

同「如来の所分別についての一考察—『秘義分別摂疏』覚え書（3）」駒沢女子大学研究紀要・第9号所収、pp.199-210

同「『秘義分別摂疏』における真如観について」平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会（佛教大学）、2003.9.6、『印度学仏教学研究』第52巻所収。pp.373-376

同「所分別と三昧についての一考察—『秘義分別摂疏』覚え書（4）」駒沢女子短期大学研究紀要・第37号所収、pp.79-85

同「唯識説における *Buddha-vacanatva* について—『秘義分別摂疏』の考察（5）—」駒沢女子大学研究紀要・第11号所収、pp.131-140

同「『秘義分別摂疏』の考察（6）—」駒沢女子大学研究紀要・第12号所収、pp.107-117

同「アーラヤ識縁起説における増益と損減—『秘義分別摂疏』の考察（7）—」駒沢女子大学研究紀要・第13号所収、pp.167-175

*2 Don gsang ba rnam par phye ba bsdus te bshad pa (*Vivṛtaguhyārthapīṇḍavyākhyā*) : Vivṛti- in Derge ed. Vivṛta- in Peking ed.

*3 gzhan dag ni...gzhan dag ni zhes so として従来の十二縁起説理解から増益と損減について以下に説明することになるが、あくまでも伝統的解釈を gzhan dag と表現する。

cing 'brel par 'byung rnams la bde ba^{*4} dang
 sdug bsngal ba^{*5} dang rmongs pa^{*6} yongs su
 'gyur pa la sogs pa nyid du sgro 'dogs pa'i
 phyir sgro 'dogs pa'o. [Der.ed.305-a-1] bdag
 nyid thams cad du med par rtogs pa'i phyir^{*7}
 skur pa 'debs pa'o zhes brdzod de. brtags pa
 la sogs pa ngo po nyid gsum dang sbyor bas
 ni ma yin no. (中略) mkhas pa ni mos pas
 sbyod pa'i^{*8} thos pa las byung ba^{*9} dang
 bsams pa las byung ba^{*10} dang bsgoms pa las
 ng ba^{*11} zag pa dang bcas pa^{*12} yin par
 bzhed la rtogs pa ni zag pa med pa'i ye shes^{*13}
 yin no.

(VGPV:Der. ed., No.4052, Ri, 305-a-1 ~ 3)

[我ら唯識派が四重二諦説において、真実の
 ままに増益と損減を断じる場合に] 他派の者た
 ちは[以下の通りに主張する。すなわち] 蘊な
 ど[十二処十八界]である諸々の縁起に対して、
 楽や苦や迷妄なることの変貌など、そういった
 [遍計された]ものとして増益される[自性の
 存在である]から増益なのである。[その意味
 で自性としての]我は完全に(本質的に)無で
 あると理解されるから損減なのである、として
 [彼の他の者達は]言語表現するのであって遍
 計所執性などの三自性[説]と結びつけられて
 [増益と損減を理解して]いることにに基づく[主
 張]ではないのである。(中略)[したがって従

来の十二縁起説に基づく認識対象への]通曉と
 [して]は、勝解行[地]における聞所成と思
 所成と修所成が有漏[の智]であるとして[『撰
 大乘論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下 MS と略
 称)の著者アサンガ尊者は]ご承認になられる
 のであるが、[我々唯識派があらたに主張する
 アーラヤ識縁起に基づく認識対象への]通曉(証
 得)することとは[三性説を理解した上での]
 無漏の智なのである。

こうした VGPV の記述と深く関連するのは、
 『中辺分別論』(Madhyānta-vibhāga-bhāṣya、
 以下 MV と略称)の第3章「真実義品」にお
 ける第15偈から第16偈である。そこでは通曉の
 真実が、自我の謬見を対治するものとして存在
 すると説明されるが、通曉それ自体が真実なの
 ではなく、対蹠的に語られているのが理解のポ
 イントとされる。すなわちその自我に対する十
 種の謬見とは、①自我が諸存在のひとつの基盤
 として実在するという誤り、②自我は諸存在の
 結果に対する原因であるという誤り、③自我は
 認識する主体であるという誤り、④自我はあら
 ゆる業のはたらく主体であるという誤り、⑤自
 我は自在力として自由であるという誤り、⑥自
 我は結果が帰属する原因として優越的に支配す
 るという誤り、⑦自我は時間的に永久な存在で
 あるという誤り、⑧自我は染汚と清浄を基盤的
 に受け容れているという誤り、⑨自我が瑜伽行

*4 bde ba...sukha

*5 sdug bsngal ba...duḥkha

*6 rmongs pa...moha

*7 rtogs pa'i phyir... rtog pa'i phyir in Pek ed.

*8 mos pas sbyod pa...adhimukti-carya-bhumi

*9 thos pa las byung ba...śruta-maya

*10 bsams pa las byung ba...bhāvanā-maya

*11 bsgoms pa las ng ba...sāśrava-maya

*12 zag pa dang bcas pa...sāśrava

*13 zag pa med pa'i ye shes...anāśrava-jñāna

*14 Gadjin M Nagao ed "Madhyānta-vibhāga-bhāṣya" Tokyo, 1964

長尾雅人 訳「中編分別論」『大乘仏典15・世親論集』所収、中央公論社、pp.284 ~ 285

を实践するという誤り、⑩自我は解脱していない段階から解脱へと赴くという誤りである^{*14}。これらの見解に先行するものとして、『瑜伽師地論』巻27における五蘊、十二界、十八処、縁起、処非処の五種善巧や、『顯陽聖教論』巻16、『三無性論』および『大乘阿毘達磨雜集論』巻11における諸説があげられるが、五種であれ、六種であれ、あるいは七種であっても、VGPVに先行する諸文献はいずれも三自性に包括されるという観点でMVと同様の主張と見なしてよい^{*15}。しかしVGPVにおけるそれは、三自性を有漏と無漏の二種の把握対象に対する認識判断から理解し、アーラヤ識縁起のみを通暁と位置づけるという主張として、ある意味で『成唯識論』における所説、すなわち真俗二諦を客観的に相互に対立した境界と認め、その中の俗諦を立場とし、その立場の上で心外の外界の諸法の実在を否定して唯識のみであると説く主張に深く関連する立場であり、独自の思想展開を垣間見せている。

2. 「金剛喩三昧」とアーラヤ識

こうして従来の十二縁起説に対して優先的に位置づけられたアーラヤ識縁起説は、その主張を成立させるために具体的な実践として「金剛喩三昧」が裏付けられていた。すなわち諸々の認識自体を収斂せしめる基盤は、どこまでも非時間的でなければならない、同時空間的理解の把

握対象は通常の観察に基づく論理展開を否定した体験的直観であり、直感にも似た観察が求められることをVGPVは以下のように説いている。

mthong ba'i lam^{*16} gyi gnas skabs na ni sgrib pa rnam pa de gnyi gai^{*17} sa bon yang dag par bcom pa^{*18} rnam par grol ba yin no. de yan chad rdo rze lta bu'i ting nge 'dzin^{*19} gyi bar du ni shes bya'isgrib pa'i sa bon lhan cig skyes pa rim gyis yang dag par 'joms te. 'jig tshogs la lta ba^{*20} dang mthar 'dzin par lta ba^{*21} lhag cig skyed pa yid kyi rnam par shes pa^{*22} dang mtshungs par ldan pa^{*23} dag ni sa bzhi pa la thams cad kyi thams cad du rnam par mnan to.de las gnas pa 'dod chags dang zhe sdang dang gti mug^{*24} rnams rnam pa thams cad du rnam par mnan pa dang nyon mongs pa can gyi yid^{*25} ni sa brgyad pa la rnam par mnan to. thams cad kyi sa bon dang nyon mongs pas 'phangs pa'i bag chags^{*26} ni rdo rze lta bu'i ting nge 'dzin gyis cig car kun nas 'joms so.

(VGPV:Der. ed., No.4052, Ri, 305-a-4 ~ 7)

見道の段階（地）においては、[煩惱障と所知障] 両方とも障礙の種子を[ことごとく] 断滅することが解脱なのである。[すなわち] そ

^{*15} 山口益『中辺分別論釈疏』破塵閣書房、1935年、p.223

^{*16} mthong ba'i lam...darśana-mārga

^{*17} de gnyi ga...tad-ubhaya

^{*18} yang dag par bcom pa...samghāta

^{*19} rdo rze lta bu'i ting nge 'dzin...vajra-upama-samādhi

^{*20} 'jig tshogs la lta ba...sat-kāya-drṣṭi

^{*21} mthar 'dzin par lta ba...anta-grāha-drṣṭi

^{*22} yid kyi rnam par shes pa...mano-vijñāna

^{*23} mtshungs par ldan pa...samprayukta

^{*24} 'dod chags dang zhe sdang dang gti mug...rāga dveṣa moha

^{*25} nyon mongs pa can gyi yid...kliṣṭa-manas

^{*26} bag chags...vāsanā

れ以降の「金剛喩三昧」に至るまでは、所知障の種子の俱生を漸次に断滅するのであって、身見と辺執見の俱生という①意識と②意識に相応するものの両者は、第四地において完全に伏滅（制圧）されるのである。それとは異なるもの、すなわち貪・瞋・痴等は、完全に抑えつけられることであり^{*27}、染汚意（汚れたマナス）は第八地において抑えつけられるのである。一切の種子と煩惱によって「一切種子識に」投げ込まれた熏習は、「金剛喩三昧」によって同時に「かつ」完全に滅除されるのである^{*28}。

ここに至って加行に対する理解は、古くからの「八正道」という次第的・論理的な性格とは明確に異なり、あくまでも同時的・体験的な実践という認識となり、瑜伽行をおさめる者たちにとっては必要不可欠な思想であることが以下の箇所から読み取れる。

"ngar sbyor ba can gyi ^{*29} shes bya ba la sogs pa ni rgyun gcig pa'i phyir de skad brjod do. rgyur gyur pa gang dag yin pa de dag rtogs pa'i sgo nas bsgrub par bya ba yin no. rtogs par bsgrub pa yang pha rol tu phyin pa'i ^{*30} mi mthun pa'i phyogs ^{*31} ser sna la sogs pa'i sa bon bcom pa dang 'khor gsum yongs su dag pas ^{*32} yongs su zin pa'i sga nas ^{*33} pha rol tu phyin pa rnams gags ^{*34} med par 'jug pa gang yin pa'o.

(VGPV:Der. ed., No.4052, Ri, 305-b-1 ~ 2)

〔MS 本文に〕「先に加行を有して云々」とは、ひとつの相続であるから、故にかくの如く表現されるのであって、およそ何であれ原因となるものであれば、それは通曉（証得）という観点から〔加行が〕証明されるべきなのである。通曉として証明することもまた、〔六〕波羅蜜の所対治（vipaksa）たる慳等々の種子が除滅されることと、そして三輪が清浄になることによって、ことごとく摂せられるという観点から、六波羅蜜が障礙無きものとして働くこと、およそそのこと〔自体が通曉としての証明なので〕である。

ただ上述の主張は、アーヤ識縁起が世尊の言葉、仏説でなければ論難から免れることは無かったのである。この点を補強した上でアーヤ識の存在を証明するために、以下の通り『阿毘達磨大乘経』の論拠をあげていたが、残念ながら砂上の楼閣の如くにその論理は、自説に裏付けられた無過失との説明自体を論拠とする二重の説明が展開されていた。

"bcom rdan 'das kyis kun gzhi rnam par shes pa zhes pa stan pas kun gzhi' i rnam par shes pa gang du zhes bya ba la sogs pa smos so." ^{*35} 'dir ni 'dri ba'i lan 'chad par 'gyur ba dang sbyar na 'dri ba 'di theg pa chen po pa mi mkhas pa zhig yin par mngon te. 'di ltar dris pa'i don theg pa chen por gtogs pa'i

^{*27} この dang は、並列なのか接続なのか不明。ひとまず接続詞として解釈した。

^{*28} これらの熏習は、即刻全滅してしまうとの意。

^{*29} ngar sbyor ba can gyi…ngan sbyor ba can gyi in MS

^{*30} pha rol tu phyin pa'i …pha rol tu phyin pa in Pek ed.

^{*31} mi mthun pa'i phyogs…vipakṣa

^{*32} 'khor gsum yongs su dag pas…tri-maṇḍala-pariśuddha

^{*33} sga nas…sgo nas in Pek ed.

^{*34} gags…gegs, vibandha

^{*35} Étienne Lamotte ed.p.4, Ch1, ll.4 ~ 5

mdo brjod pas gtan la dbab pa mdzad do.

'on te sde pa zhig 'dri na 'on kyang nyes pa
med de. 'di ltar de ltar tshad mas theg pa
chen po sangs rgyas kyi gsung yin par khas
len du bcug pas so. yang na slob dpon nyid
kyis ma 'ongs pa'i skye bo la bltas nas^{*36}
bdag nyid kyis dris nas lan gdab pa byas pa
yin no.

(VGPV:Der. ed., No.4052, Ri, 306-a-1 ~ 3)

[MS 第1章第1節にて]「世尊によってアー
ラヤ識 [を知られるべきものの拠り所] とする
ことによって、アーラヤ識なるものは [世尊は]
どこで [説かれたのか、そしてどこでアーラヤ
識という名称を用いて説かれたのか] 云々^{*37}」
と言われたのである^{*38}。ここでは [この
論難である] 質問の答えが説明されるであろう
ことと言葉を結びつけて考えるならば、この質
問者は大乘の学無き者 (愚鈍者)^{*39}であるとい
うことは明確なのであって、何故ならば [かの
アサンガ尊者は] 質問の意味を『阿毘達磨大乘
経』が述べられることによって確認なさってお
られるのである。しかし、もしもある經典
(nikāya) のあるものを [アーラヤ識の説かれ
た場所として] 問うならば、むしろ [我々唯識
派にとっては] 過失は無いのである。何故なら
ば判断根拠 (pramāṇa) によって大乘は仏説で
あると [既に] 主張をなしているからである。
あるいはまた、[著者としての] アサンガ尊者
ご自身によって、未来の人々において見られる

のであって、論師ご自身が請問されてお答えに
なられるのである。

以上、アーラヤ識の存在証明としての VGPV
の記述には、多くの問題点が見られると同時に、
実はその半ば強引な主張が MS のみでは読み取
ることの出来ない VGPV 独自の思想的特徴を
表現しており、MV などの先行文献とは明らか
に系統の異なるもう一つの唯識派の流れが見え
てくるのである。そこで今回も前回の考察箇所
に続く試訳を以下に提示する。

3. VGPV 試訳

凡 例

- 1) 試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補
足的に必要なに応じて北京版を利用した。

Der. ed., No.4052, Ri, 296-b-1 ~ 361-a-7

: Tibetan Tripittaka, bstan 'gyur,
preserved at the Faculty of Letters,
University of Tokyo,

SENMS TSAM Vol.12, 通帙第236 (Ri)

Pek. ed., No.5553, Li, 356-b-7 ~ 434-a-8

- 2) 固有名詞ならびに通常音写語として用いら
れる術語は、カタカナ表記とする。
- 3) 本書のテキスト MS 中にて言及されている
部分は、「 」によって示した。
- 4) 重要な術語は、() によってチベット
訳を示した。また未確認ではあるが、おそら

^{*36} bltas nas...avalokya

^{*37} MS によれば「世尊は『阿毘達磨大乘経』において説かれた」と説明し、次なる偈頌が提示されている。ただしこの部分は『唯
識三十頌論』中に引用されているため、サンスクリットの回収が可能となっている。長尾雅人『撰大乘論・和訳と注解・上』
インド古典叢書、講談社、昭和57年、p.75 ~ 76参照。

^{*38} Étienne Lamotte ed, *LA SOMME DU GRAND VÉHICULE D'ASAṅGA*(MS), TOME 1, UNIVERSITÉ DE LOUVAIN
INSTITUT ORIENTALISTE LOUVAIN-LA-NEUVE, 1973, p.4.11.4 ~ 5

^{*39} theg pa chen po pa mi mkhas pa zhig となっているが、文脈から theg pa chen po la mi mkhas pa zhig とした。ちなみに
北京版も theg pa chen po pa となっている。

く誤りではなかろうと思われる還元のサンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に（ ）によって示した。

5) 原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は〔 〕によって示した。

6) 典籍一般は、『 』によって示した。

7) なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本語として不自然な文章箇所も〔 〕によって整え、敢えてそのままの表現を残した。

[from Der.ed.306-a-4, Pek.ed.367-b-8]

【1】アーラヤ識の同義異語

〔MS 本文の冒頭部分は、アーラヤ識の同義語を扱う箇所ではあるけれども、アーラヤ識そのものについて直接問われるならば、論師アサンガご自身はすでにその意味をお考えになっておられるので、存在を証明する機会に該当するのである^{*40}。したがって〕ある観点でいえば、アーラヤ識についての回答 (pratividhāna) を〔論師アサンガによって〕なし給うのであれば、また、あたかも先に^{*41}〔MS の第1章として〕「知られるべきもののよりどころ」が示されて、アーラヤ識が示されたように、ここでも「知られるべきもののよりどころ」の本質を詳しく考察することによって、アーラヤ識という語を〔論師アサンガが〕詳細に検討なさったのである。

同義異語に関する〔アーラヤ識の〕本題の箇所

所としては、何が相当するのか、といって言語表現することもまた出来ないのである。何故ならば、〔アーラヤ識の〕自相が示される〔ほどの重要な論説箇所として〕は、このような〔同義異語を扱う〕もの（コンテキスト）ではないということが、後ほど説明されるだろうからである。

【2】知られるべきもののよりどころ

〔MS の第1章において『阿毘達磨大乘經』の偈文として世尊が示された〕「無始時來 (anādikālika)」といわれる〔語〕は、「突然 (āgantuka) に生起するのではない」という意味^{*42}である。〔それに続く〕「界 (dhātu)」といわれる〔語〕は、「因 (原因、素因)」といわれる言葉の主旨である^{*43}。「一切諸法の平等なるよりどころ (sarva-dharma-samā-āśrayaḥ)」といわれるのは、ここ（よりどころ）においては、しばらく善業と不善業は基盤〔としては相応しく〕ないのである^{*44}。もし、それら（善業と不善業）がよりどころ（基盤＝ものごとの原因）たり得るのならば、〔よりどころから生起してくる結果というものは〕異熟果 (vipāka-hetu) に属することになるのであろうが、その場合〔の結果である〕異熟果は同時に生起するもの (sahagata) か、あるいは無間 (等無間、nirantara) の〔異熟果という〕ものか〔などと議論することは〕あり得ない（成立しない）

^{*40} すなわちアーラヤ識の同義語を質問する箇所ではあっても、アーラヤ識そのものを直接質問する箇所として当たらないというわけではなく、やはりアーラヤ識の設定の意図として当たるのである、と解釈した。あらゆる存在と時間の基盤としてアーラヤ識を位置づけており、『唯識三十頌』(Triṃśikā) が MS 第1章第1節の偈頌を引用してアーラヤ識の存在証明を行っている。

^{*41} 「先に」とは、MS の章分けである十種の道理に関する順序として、何故に第1章の「所知依」の次に第2章の「所知の相」が説かれているのかについて説示した箇所を指す。具体的には Vi303-b-4～6の周辺のこと。

^{*42} 無始時來だから実体がなく、盤石でないことはあり得ない、ということになる。つまりこの基盤、アーラヤ識は偶然 (āgantuka) ではないという主張の基本的典拠として認められる重要な箇所である。限りなく如来像思想に近づいているアーラヤ識説が述べられており、VGPV の思想系譜として特徴的である。

^{*43} MV Ⅲ、K-17cd における dhatu-artha の箇所、あるいは MV Ⅰ、K-15における śūnyatā-paryāyārtha の箇所を参照されたい。

^{*44} 善悪という概念は相対論であり、すぐに消え去ってしまう無常の存在だから、一切諸法のよりどころのように、万物の基盤にはなり得ないという意味。

のだから、およそ如何なる時であれ、かの果報が生じる時ならば、その時は彼の〔善業、不善業といった〕業 (karma) は〔すでに〕過ぎ去るのである^{*45}。〔したがって、その〕過ぎ去るものはまた、〔諸々の存在の〕よりどころ (基盤、素因) ではないのである。何故ならば、〔もしも、諸々の存在にとって基盤なのであれば、滅ぶことはあり得ないのに、過ぎ去る〕為すもの (有為) は滅ぶからである。例えば虚空華 (ākāśa-puṣpa) の如くである。

【3】一切法の基盤の定義

〔上述のように〕同分 (同類性、同衆分、sabhāga) と命根 (jīvita-indriya) の両者はまた、〔諸々の存在にとって〕よりどころそのものではないのである。何故ならば〔同分と命根は〕実事 (dravyatas) としては存在しないからである。もしもそれ (同分と命根) が、すべてのもの (諸存在の全体を包括するような基盤) であるとしても^{*46}、計量できるものとしてのよりどころになるだろう。〔しかしながら、実際はそうではない^{*47}。ただ単純に〕さまたげ (障礙) をなさないことを本性 (自性) として有するという〔特質から〕のみを根拠として、一切〔法〕のよりどころであるというような理解もまた、できないのである。何故ならば、よりどころが無いということもまた、よりどころそのものであるという過失になるだろうからである。

〔したがって〕同様に自己によって判断される、それ以外のもの^{*48}も、よりどころ (基盤) である〔という特質としては、それら〕が否定され〔るのだから〕、実に一切法のよりどころとは、アーラヤ識〔のこと〕なのである。

およそ何であれ、アーラヤ〔識〕が何らかのものの基盤であるような場合、その〔アーラヤ識という基盤に帰属しているものの〕すべてを〔論師アサンガ尊者が〕考察なされようとするために、〔MS 本文の第1章第1節において『阿毘達磨大乘經』の偈文として〕「これ (アーラヤ識という基盤) があるからこそ、あらゆる〔迷いの〕生の境位 (趣、gati) があり、また涅槃の獲得 (nirvāṇādhigama) があるだろう。」といわれることが説かれたのである。「あらゆる〔迷いの〕生の境位 (gatiḥ sarvā)」といわれるのは、〔アーラヤ識は〕雑染 (saṃkleśa) の基盤たるものだからである。「また涅槃の獲得があるだろう。」といわれることについて述べるならば、聞・思・修 等の次第 (kramena) によって〔アーラヤ識は〕清浄たることの基盤であると〔いう意味をMSは〕示すのである。〔また〕因が無いという主張を否定するために、〔先に〕「無始時来」といって説くのである。

【4】他学派への批判

およそ如何なる主張であれ、〔サーンキヤ学派の如き〕ある者が相違因 (virodha-hetu)^{*49}、

^{*45} 過去における業が善とか不善、あるいは悪と性格づけられるのに対して、結果としての熟果は、それら素因とは異なってもたらされる結果であるから異熟果といわれる。したがってアーラヤ識は異熟識とも表現され、善でも悪でもない、まさしく「無記 (anivṛtāvyākṛtā)」であるような因果関係となる。もしもアーラヤ識が異熟識として無記でなければ、その基盤たるアーラヤ識を転換させ、解脱せしめることも不可能となり、善悪などが障害となってしまうからであろう。MS I -62に関連記述あり。

^{*46} 「同分と命根が、すべてのもの (諸存在の全体を包括するような基盤) であるとしても」とは、「あらゆる存在に対して認識判断が可能だとしても」と理解した。

^{*47} tṣhad yod pa とは、計ることのできるような存在。数えられるもののこと。

ここでは同分とか命根が、数えられるような物質的な性格であろうはずがない、という常識が背景にあることから理解した。

^{*48} 「それ以外のもの」とは、他者によって判断されたもののことか。

^{*49} virodha-hetu : 相違因。あらゆる物質が生起し、持続し、変化し、獲得される場合に障害となるもののこと。十因のひとつに数えられる。

すなわち根本原質 (pradhāna、最勝)^{*50}などといったものを常住なるものとして無始時來と理解することがあるならば、そういう彼ら (サーンキヤ学派) を完璧に断じるために、「等しいよりどころ (samāśraya)」といわれることが説かれるのである。[それらの]「結果と等しいならば、よりどころなのである。」という意味であって、あたかも結果が生起と結びつくことは真実であるように、およそ何であれ、原因が生滅[の変化を]伴う場合であれば、それは「原因が」結果と等しいことを意図している。

同じようにある主張として、即ちある者は常住なる原因からも結果は生起し、そして原因は作用を伴うものとして考えを主張する、およそそのような場合がある。例えばヴァイシェシカ (Vaiśeṣika)^{*51}などといった如きである。それを「論師アサンガ尊者は」否定するために、[MS 本文の第1章において『阿毘達磨大乘經』の偈文として]「これ (諸法の基盤、dhātu) があるからこそ (tasmin sati)」と説くのであり、まさに「諸法の基盤には」作用がない性質として、ただ存在することのみによって原因なのである、という意味である。

この「[これがあるからこそ]という言葉」についてはまた、「これ (dhātu) だけがある時」といわれる「第一の限定」と、「これ (dhātu) がある時だけ」という「第二の限定」と、双方[の解釈]から限定される (avadhāraṇa) のであると知られるべきである。

およそ何であれ、原因は常住であるが、我 (ātman) 等の実体や、他に根本原質 (pradhāna、最勝) から結果が生じるというような考え方が

ある場合、それは第一の限定 (「これ (dhātu) だけがある時」という解釈) によって排除される「べき見解なの」である。

およそ何であれ、実在するということと作用を伴うということによって、「これ (dhātu) が」原因の事物 (bhāva) であると考えを主張するような者がある場合、それは第二の限定 (「これ (dhātu) がある時だけ」という解釈) によって「排除されるべき見解なの」である。

【5】雑染と清浄の基盤

さらに詳細に検討されるべきであり、すなわちここでは、いつ如何なる時に「雑染のよりどころたるもの」としてアーラヤ識と名づけられるのか[という主題について考察すれば、]次のように「雑染なる一切の諸法を[アーラヤ識に]結びつける」と、[MS 本文の第1章第3節に]説明されることになるといった場合ならば、そのような側面としては、「無始時來の基盤 (dhātu、界) と[MS 本文の第1章第1節、『阿毘達磨大乘經』の偈文として]いわれることは、雑染のよりどころたることを根拠として基盤であることを意図しているのであり、その時だけが因縁^{*52}であるが故に、[同じ偈文に]「これがあるからこそ、あらゆる[迷いの]生の境位 (gaṭiḥ sarvā) があり」といわれるのである。

清浄なることに相対するというならば、雑染なる種子[である。何故ならば清浄なることは雑染なることの]増上縁 (adhipatipratyaya) であって、所治 (vipakṣa) が無いのであれば能治 (pratypakṣa) も無いからである^{*53}。したがって増上縁であるが故に、[先の『阿毘達磨大乘經』

^{*51} ヴァイシェシカ (Vaiśeṣika) 学派では、①実体 (実) ②性質 (徳) ③運動 (業) ④普遍 (同) ⑤特殊 (異) ⑥内属 (和合) の6原理で現象界を説明する。①実体は②から⑥までの所有者 (よりどころ) となっているので、内属因 (samāvayī-kāraṇa、和合因) といい、逆に②から⑥までは①に帰属した場合のみ出現するから、②から⑥までは果 (結果) ということになる。両者は時間的前後関係にあるのではなく、あくまでも出現と帰属の内属関係にある。

^{*52} 因縁は第一原因。hetuは直接的な原因のニュアンス。

^{*53} 清浄にとって雑染は、対治のはたらきを持つものとしてむしろ手助けになる、というほどの文脈であろう。

の偈文の続きに]「涅槃をも獲得 (nirvāṇādhigama) することになるだろう。」と説かれたのである。

[それでは] いつ如何なる時に雑染なる種子にも依存し、[かつ] 清浄なることとしての本性の種子にも依存してアーラヤ識と名づけられるのだろうか。[これについて答えるならば、例えば]『勝鬘經 (Śrīmālādevī-siṃhanāda-sūtra)*⁵⁴』の中に、「清浄なる種子に依存して、あらゆる衆生は如来の蔵を有するのである。」と出ており*⁵⁵、また『大般涅槃經 (Mahā-parinirvāṇa-sūtra)』の中に、「アーラヤ識と生起する識とによって、受用身 (sambhoga-kāya) が積集されるのである*⁵⁶。」と出て出ているが如きものである*⁵⁷。それ故に以下の通りである。すなわち「無始時來 (anādikālika) の界 (dhātu)」といわれることは、[清浄と雑染との] ふたつながらの種子に依存して[“アーラヤ識”と] 術語表現されているのである。その時はまた、善趣 (sugati) となるところの雑染なる種子は、因縁であるが故に、[いつであれ、雑染なる種子にも依存し、[かつ] 清浄なることとしての本性の種子にも依存してアーラヤ識と名づけられる*⁵⁸] その時はまた、善趣となるところの雑染なる種子は因縁であるが故に、そして解脱に準じる (mokṣa-bhogīya、準解脱分) 聞所成 (śruta-mayī-prajñā) 等の善根を積集したものである清浄となった種子が増えて、しかも雑染の種子も取り除かれた後に、十二刹那の和合*⁵⁹によって享受される人格の形成

(ātma-bhāva) が現前と完成するという観点から、清浄なる種子は、増上縁であるが故に、[『阿毘達磨大乘經』の偈文として]「これ (アーラヤ識という基盤) があるからこそ、あらゆる [迷いの] 生の境位 (趣、gati) が」といわれることが説かれたが、[他方で] 雑染という対治 (vipakṣa) という本質 (あり方) としては、増上縁であるが故に、そして清浄なる種子は因縁であるが故に、「また涅槃の獲得 (nirvāṇādhigama) があるだろう。」といわれることが説かれたのである*⁶⁰。 (未完)

4. VGPV 蔵文

[from Der.ed.306-a-4, Pek.ed.367-b-8]

【1】

rnam pa gcig tu na un gzhi'i rnam par shes pa'i lan gdab par mdzad pa yin na yang ci ltar sngar*⁶¹ shes bya'i gnas bstan nas kun gzhi'i [Pek.ed.368-a-1] rnam par shes pa bstan pa de bzhin du 'dir yang shes khyal'i gnas kyi ngo bo nyid dpyad pas kun gzhi rnam par shes pa'i sgra dpyod par mdzad pa yin no. rnam grangs kyi skabs su don gyi skabs la ci 'bab ces brjod par yang mi nus te. rang gi mtshan nyid bstan pa 'di ltar ma yin pa ni 'og nas 'chad par 'gyur pa'i phyir ro.

【2】

thog ma med pa'i du kyi zhes bya ba'i globur

*54 正しくは『勝鬘師子吼一乘大方廣方便經』

*55 『勝鬘經』「自性清浄章」大正蔵 Vol.12, p.222-b の部分か。これについては次回に検討する予定。

*56 法身とは転識を特質とすることになる重要な箇所。のちに MSA では三身と八識の関係が明示されることになる。

*57 『大般涅槃經』巻2「壽命品」第1の2、大正蔵 Vol.12, p.374-c の部分か。これについても次回に検討する予定。

*58 307-a-3における gang gi tshe からの続きとして読むべきか。

*59 刹那縁起のこと。刹那の間の行為に十二因縁を具えていること。Abhidharma-kośa-vākhyāp.286.l15f

*60 アーラヤ識が真妄和合のゼロの状態として理解され、涅槃が場的性質としてあたかも容器の如くにはたらいっている意味。

*61 ci ltar sngar...ji ltar sngar (Pek ed)

*62 'dri ba'i...dra ba'i (Pek ed)

du byang ba ma yin no zhes bya ba'i don to.
 dbyings zhes bya ba ni rgyu zhes bya ba'i tha
 tshig go. chos rnams kun gyi 'dri ba'i^{*62} gnas
 zhes bya ba ni 'di la zhis las dge ba dang
 mi dge ba ni gnas ma yin no. de dag nas shig
 yin na rnam par smin ba'i 'bras bu'i yin par
 'gyur grang na rnam par smin pa'i 'bras bu
 lhan cig pa 'm de ma thag pa ni med pas gang
 gi cho 'bras bu de byung ba na las de 'das so.
 'das pa yang gnas ma yin te byed pa zhis pa'i^{*63}
 phyir nam mkha'i me tog bzhin no.

【3】

[Der.ed.306-b-1] skar ba mnyam^{*64} pa dang
 srog gi dbang po^{*65} dag kyang gnas nyid ma
 yin te. rdzas su^{*66} med pa'i phyir ro. gal te de
 thams cad^{*67} yin pa zhis tu gyur na yang
 tshad yod pa zhis gi^{*68} gnas yin par 'gyur ro.
 bgegs mi byed pa'i ngo bo tsam gyis kun gyi
 gnas so zhes brtags par^{*69} yang mi nus te. 'di
 ltar gnas med pa yang gnas nyid du thal bar
 'gyur ro. de bzhin du rang gi sde pas kun
 brtags pa gzhan yang gnas yin pa nyid dgag
 pa dang shugs kyis chos kun gyi gnas ni kun
 gzhi'i rnam par shes pa yin no. kun gzhi gang

gi gnas yin pa'i kun de^{*70} brtags pa'i phyir de
 yod pas na 'gro kun dang mya ngan 'das pa'ng
 thob par 'gyur zhes bya ba smos te. 'gro kun
 zhes bya ba ni kun nas nyon mongs pa'i^{*71}
 gnas nyid yin pas so. mya ngan 'das pa'ng
 thob par 'gyur zhes bya ba ni thos pa dang
 bsams pa la sogs pa'i rim gyis rnam par
 byang ba'i gnas nyid yin par ston to. rgyu
 med par smra ba dgag pa'i [Pek.ed,368-b-1]
 phyir thog ma med pa'i dus zhes bya ba smos
 so.

【4】

smra ba gang dag kha cig mi thun pa'i rgyu
^{*72} gtso bo^{*73} la sogs pa rtag pa nyid kyis
 thog ma med pa'i dus par rtag pa yod pa de
 dag yongs su spang ba'i phyir 'dra ba'i gnas
 zhes bya ba smos so. 'bras bu dag dang 'dra
 na gnas yin no zhes bya ba'i don te. ji ltar
 'dras bu skye ba^{*74} dang 'brel pa de kho na
 bzhin du rgyu gang zhis skye ba dang 'jig pa
^{*75} dang ldan pa de ni 'dras bu dang 'dra bar
 dgongs pa yin no. de bzhin du smra ba gang
 kha cig rgyu rtag pa las kyang 'bras bu skye
 la rgyu ni byed pa dang ldan pa^{*76} nyid du

*63 滅ぶ、の意味か。ひとまず自動詞として訳した。

*64 skar ba mnyam …sabhāga

*65 rog gi dbang po …jīvita-indriya

*66 rdzas su …dravyatas

*67 de thams cad は認識対象の全体を包括できるような基盤を指す。

*68 この gi は、同分や命根が数えられる如きもののよりどころであっても、VGPV の著者にとっては価値的に決して悪いことではないと思うが、諸法の基盤にはなろうはずがない。したがって真実のよりどころではない、というニュアンスの逆接に解した。

*69 brtags par…brtag par (Pek ed)

*70 gang gi gnas yin pa'i kun de で、アーラヤ識の上に乗っかっているもの、およそそれらすべてを、と解した。

*71 kun nas nyon mongs pa…samkleza

*72 mi thun pa'i rgyu…virodha-hetu

*73 gtso bo…pradhāna

*74 dras bu skye ba…phala-utpatti

*75 skye ba dang 'jig pa…utpāda-bhaṅga

*76 byed pa dang ldan pa …sakāritra (AK)

rtogs par byed pa yod de. dper na bye brag pa dag^{*77} lta bu'o. de dgag pa'i phyir de yod pas na zhes bys ba smos te. byed pa med pa kho nar yod pa tsam gyis rgyu yin no zhes bya pa'i tha tshig go. 'dir yang de kho na yod pas zhes bya ba dang de yod pa kho nas shes gnyi gar nges par gzung bar bya^{*78} rig par bya ste. gang dag rgyu rtag pa yin la bdag la sogs pa'i rdzas dang gzhan gtso bo las 'bras bu 'byung bar rtog par byed pa de dag ni nges bar bzung ba dang bos bas la to. gang dag yod btsam dang byed pa dang ldan pa nyid kyis rgyu'i dngos bor rtog par byed pa de dag ni nges par gzung ba gnyis pas so.

[5]

yang [Der.ed.307-a-1] dbyad par bya ste 'dir gang gi tshe kun nas nyon mongs pa'i gnas nyid kyis kun gzhi rnam par shes par tha snyad gdags te. ji skad du kun nas nyon mongs pa'i chos thams cad sbyor ba zhes 'chad par 'gyur ba lta bu zhig yin na ni phyogs de la ni thog ma med pa'i dus kyi dbyings zhes bya ba kun nas nyon mongs pa'i gnas nyid kyis dbyings yin par dgongs te. de'i

tshe ni rgyu'i rkyen yin pa'i phyir de yod pas na 'gro kun dang zhes bya'o. rnam par byang ba la ltos na ni kun nas nyon mongs pa'i sa bon te. bdag po'i rkyen^{*79} yin te mi mthun pa'i phyogs^{*80} med par gnyen po^{*81} med pa'i phyir ro. de bas na bdag po'i rkyen yin pa'i phyir [Pek.ed.369-a-1] mya ngan las 'das pa'ng^{*82} thob par 'gyur zhes gsungs so. gang gi tshe kun nas nyon mongs pa'i sa bon la yang ltos rnam par byang ba rang bzhin gyi rigs^{*83} la yang ltos nas kun gzhi'i rnam par shes par tha snyad gdags te. dpal phreng seng ge'i nga ro'i mdo^{*84} las rnam par byang ba'i sa bon la ltos nas sems can thams cad de bzhin gshegs pa'i snying po^{*85} can no shes 'byung ba dang mya ngan las 'das pa chen po'i mdo^{*86} las kun gzhi rnam par shes pa dang 'jug pa'i rnam par shes pa dag gis longs sbyod rdzogs pa'i sku^{*87} bsdus so zhes gang 'byung ba lta bu zhig yin na ni de'i phyir 'di lta bu yin te. thog ma med pa dus gyi dbyings zhes bya ba gnyi ga'i sa bon la ltos te tha snyad gdags so. de'i tshe yang bde 'gror^{*88} 'gyur ba'i kun nas nyon mongs pa'i sa bon rgyu'i rkyen^{*89} yin pa'i phyir dang thar ba'i^{*90}

*77 bye brag pa dag...Vaiśeṣika

*78 nges par gzung bar bya...avadhāraṇa

*79 bdag po'i rkyen...adhipati-pratyaya

*80 mi mthun pa'i phyogs...vipakṣa

*81 gnyen po...pratypakṣa

*82 mya ngan las 'das pa...nirvāṇa

*83 rang bzhin gyi rigs...prakṛti-gotra

*84 dpal phreng seng ge'i nga ro'i mdo...Śrīmālādevī-simhanāda-sūtra

*85 de bzhin gshegs pa'i snying po...tathāgata-garbha

*86 mya ngan las 'das pa chen po'i mdo...Mahā-parinirvāṇa-sūtra

*87 longs sbyod rdzogs pa'i sku...sambhoga-kāya

*88 bde 'gror...sugati

*89 rgyu'i rkyen...hetu-pratyaya

*90 thar ba...thar pa (Pek ed)

*91 thar ba'i cha...mokṣa-bhāgīya

*92 hos pa las byung ba [shes rab]...śruta-māyī-[prajñā]

cha^{*91} dang mthun pa thos pa las byung ba^{*92}
 la sogs pa'i dge ba'i rtsab^{*93} bsags pa rnam
 par byang ba'i sa bon 'phel zhing kun nas
 nyon mongs pa'i sa bon yang bsal bar byas
 nas skad cig ma^{*94} bcu gnyis 'dus pas nye
 bar gzung ba'i bdag gi ngo bo^{*95} mngon par
 grub pa'i sgo nas rnam par byang ba'i sa bon
 bdag po'i rkyen yin pa'i phyir te yod pas na
 'gro kun dang zhes bya ba gsungs la kun nas
 nyon mongs pa mi mthun pa'i phyigs kyi^{*96}
 ngo bos bdag po'i rkyen yin pa'i phyir dang
 rnam par byang ba'i sa bon rgyu'i rkyen yin
 pa'i phyir mya ngan las 'das pa'ng thob par
 'gyur zhes bya ba gsungs so. [Der.ed.307-a-7,
 Pek.ed,369-a-7]

*93 dge ba'i rtsab…kuśala-mūla

*94 skad cig ma…kṣaṇā

*95 bdag gi ngo bo…ātma-bhāva

*96 kyi…kyis (Pek ed)

文脈から北京版の具格を採用して「雑染の所対治について」とした。